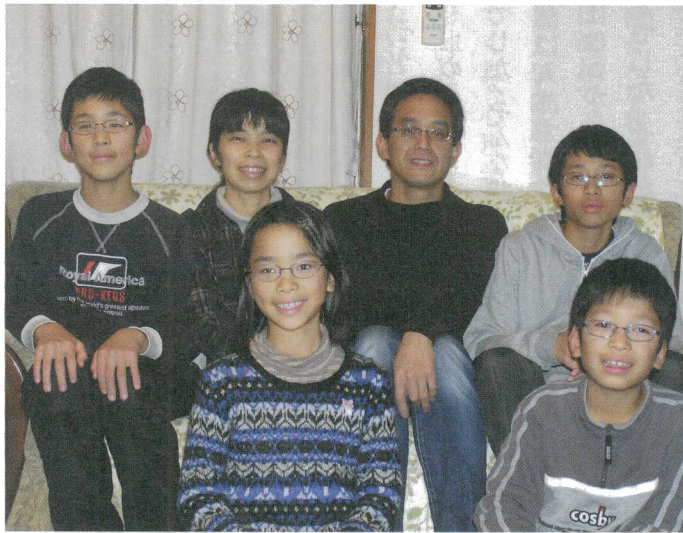




後列左から次男の誠治さん、たまきさん、夫の明文さん、長男の直人さん
前列左から長女のひとみさん、三男の雄基さん

「私は大丈夫」からの解放

松下 たまき

救われるまで

一九七三年に東京・杉並の普通のサラリーマン家庭に生まれ、両親と姉二人の五人家族で、特に大きな問題もなく育ちました。上の姉の通っていた幼稚園に集会の姉妹がおられて、その姉妹を通して母が救われ、福音が我が家に入ってきました。ですから、私は物心つく前からイエス様のお名前を聞いていました。その後、千葉市に移り住みました。当時、千葉に集会はなく、母が自宅で集会を開いていました。小学生になると、三姉妹で電車を乗り継ぎ、千葉から吉祥寺集会まで日曜学校に通いました。軽井沢の旧バイブルキャンプにも家族で参加しました。中学生のころ市川に集会ができ、市川集会に集うようになりました。父は、特に反対もせず、母と子供たちが集会に集うことを許していました。数年間一緒に礼拝に通った時期もありましたが、そのうち父はビタリと来なくなりました。物静かで頑固な父で、その後集会に集うことはありませんでしたが、晩年に

いは何ひとつなく、イエス様におできにならないことは何ひとつない、と確信できる毎日に変えてくださったのはイエス様の憐みでした。
目に見える現実にとらわれては慌(あわ)てふためき、じたばたする私ですが、静まって祈り聖書を開くときに、イエス様が「わたしだ、このことはわたしから来たのだ」と語ってくださいます。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎になくなる。

しかし、私は主にあつて喜び勇み、私の救いの神にあつて喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。(ハバクク 3・17〜19)

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうち

に新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。(詩篇 51・10〜12)

みことばという大きな希望をいただいていますことを心から感謝しています。イエス様が来てくださるその日まで、イエス様を愛する兄弟姉妹と一緒に信仰の道を歩み続けたいと切に願っています。

杉本淳子(すぎもと あつこ)

一九五七年、京都府生まれ

帝塚山学院中等部、高等部、甲南女子大学文学部卒業

夫 杉本文雄(すぎもと ふみお)

与えられた病を通して、七十三歳の時に救われ、天国へ行きました。

私自身は、イエス様に対して非常にあやふやでした。幼少期に福音を聞いていたので、疑いはしない、という程度のものでした。自主的な思いはありませんでした。「救い」「罪」の意味がまったく分かっていませんでした。お話しやみことが心に響いたりすることもなく、集会の兄弟姉妹が喜んでる姿も理解できませんでした。しかし、そういう疑問を口に出すことはせず、集会に行くのを止めるという発想もなく、ずるずると通っている状態でした。そんな状態でしたから、高校生になり、吹奏楽部に入部すると、当然のように部活を優先させ、集会には行かなくなりました。母も不思議と何も言いませんでした。それから、時々、自分の都合のいいときにだけ、心の中で都合のいいお祈りをするだけでした。

今だから言えることですが、私は幼いときから、この世に魅力的と言われるものを何も持っていないと感

じていました。自信がなく、大人しく、人見知りで、口べたで、自意識の強い、厄介な性質です。人といると緊張してしまい、一人であることを決め込むこともできず、自分を少しでも良く見せようと努め、なんとか人の輪の端っこに居心地悪くいることしかできませんでした。この世を楽しく充実して過ごせる人が、羨ましくて仕方ありませんでした。どうにか自分もそうなりたいたいと思いました。どうがんばってもなれませんでした。いつかは何かなるのではないか？という不確かな希望で自分を納得させていました。どうして人の世界に生まれたのだろうと、創造主なる方につぶやいていました。プライドだけが自分を支えていた気がします。中身は空っぽで、プライドだけは高い人間になっていきました。福音を聞いていたにもかかわらず、心は閉ざされていて、この世を楽しく充実して生きることが人生の目標と思って疑わず、それができない自分、やりたいことも見つけられない自分、そういう力のない自分はなんなのだろう？

と、悶々と自分のことばかりを見つめていました。ただ私はなんとかなっている。私は大丈夫、という振りをするしかない、まったく虚しい日々でした。

心はそんな状態でしたが、表面では平静を装い、月日だけは流れて、高校を卒業。やりたいことが見つからないので、大学に進学することしか思いつかず、両親も了解してくれ、心理学系の学部へ進みました。心理学が流行っていた頃で、自分の悩みの解決の助けになるかも知れないという淡い期待をもっていました。四年間高い学費を親に払ってもらって分かったことは、心理学は問題を複雑化させるだけで解決はない、ということでした。大学二年の頃、それまでなんとか取り繕ってやっていたやり方にも疲れが出て、力が尽きたようになってしまいました。そうなったとき、これは不思議なのですが、「私はいま、イエス様のところに行くしかない」という思いが心の奥底から湧いてきました。イエス様が私を呼んでくださったときだったのだと思います。それから、

今度は自分の意志で、集会に集うようになりました。

再び集会に集うようになりましたが、すぐに変えられることはなく、メッセージは聞いたことのあるお話ばかりで、喜んでおられる兄弟姉妹は眩しく、交わりは苦手で、自分のことを話そうにも言葉にならず、だいたいい隅っこで泣いていました。この頃考えていたことは、救いてなんだろう、解放ってなんだろう、どうしたらそうなるのだろう、どうしたら兄弟姉妹のように明るく喜べるのだろう、どうしたら、どうしたら……、ただ自分の苦しさを解決したい一心で、イエス様のところに行けば、苦しさを解決してくれる、解決されれば、私は元気にこの世を歩んでいける、という、イエス様が提供されている救いとはかけ離れた、自分本位の身勝手な考えでした。思いはこの世のことにだけ向いていました。信仰の確信をつかめないまま、大学はなんとか卒業。就職活動をする力はなく、集会の兄弟の会社に雇っていただきました。社会人となりましたが、そのような軟弱な私でした。

ので、職場の方々には大変ご迷惑をおかけしました。それまで逃げ回っていた実地訓練を初めて受けた時期でした。緊張で顔は青ざめ、頭の中は真っ白で、逃げて帰りたいのをやっとこらえていました。会社には集会の兄弟姉妹がたくさんおられ、仕事の合間にお交わりにもあずかり、分かつて、分からなくてもいいから、とにかくくみこばにすがりつくことを教わったのはこの時期だったと思います。

就職を通して少しずつ鍛えられ、一人暮らしもするようになり、自立できるように導いていただきました。吉祥寺の近くに二人暮らしをしていましたので、集会は近く、折つてくださり交わつてくださる兄弟姉妹にも恵まれました。今思い返しても、本当に至れり尽くせりでした。相変わらず、はつきりとした体験をもつて救われた方や、喜んでいる方を見ると羨ましく思っていました。しかし、自分の中に何かを見出すのではなく、聖書のみことばを丸ごと自分のものとして受け取つてよい、

ということ聞き、何も分かりませんでした。そうしてよいなら、そうします、と単純に受け取るようになっていきました。それまで、信仰をとて複雑に考えていました。今でもいつ自分が救われたのか分かりません。

結婚と子育てを通して

二〇〇二年、就職六年目の時、周囲のお祈りに支えられ、集会の兄弟であつた主人との結婚に導かれました。結婚できるならしたい、という漠然とした思いはありましたが、自信がなく、結婚についても何の希望も持っていませんでした。兄弟姉妹の祈りから始まり、三度目の紹介で出会つたのが主人です。まったくの初対面でしたが、お会いして緊張が解けてくると、今まで感じたことのない圧倒的な安心感が空間をつつんでいて、主のご支配がありました。人といふことに疲れてしまう私でしたが、飾らなくても、黙っていても、そのままいることができました。もはや疑いようがなく、出会つてから一

か月後に結婚の約束をし、半年後に御代田福音センターでの結婚式に導かれました。式までの間、細かいことや心配の先取りをして勝手に不安になることはあつても、まったく平安でした。ある時に不安や心配の根っこには、すべて自分が失敗し傷つくことへの恐れがあることに気づき、罪を実感しました。でもイエス様はその罪を「十字架の御業（みわざ）」で赦してくださったこと、だからこの不安心配はもうなんの力も持っていないことを同時に感謝しました。とても身軽、気楽になつて結婚へと向かうことができました。結婚生活は十四年目になりましたが、今も平安は変わりません。日々イエス様から頂く「恵み」です。

わたしが目を留める者は、へりくだつて心碎かれ、わたしのことばにおののく者だ。 (イザヤ 66:2)

子育ては私が碎かれる道のでした。私たち夫婦に

8人の証し

Unser Herr lebt

は四人の子供が与えられています。二〇〇四年二月生まれの長男を筆頭に、次男、三男、長女と四人の子供が年子で次々と与えられました。次男には視覚障害があります。三男、長女も軽度の弱視があると言われました。慣れない子育てのなか、長男は二歳から保育園に預け、下の三人を連れて、眼科に、盲学校の教室へと通い、家事育児に奮闘しました。両方の実家は遠く、主人が仕事でいない平日は基本的に私一人が家のことをすべて回さなければなりません。健康と体力には恵まれていましたが、出産の続いたこの数年間で体力はすべて使いきった感じで、健康と体力への自信がなくなりました。末っ子の出産後には溜まりに溜まった疲れが噴き出して、頭痛、吐き気で食べられなくなり、二、三日寝込むことを繰り返し、家事をすることもできない日が出てくるようになりました。今思うと、私の力をなくし、弱くするための、イエス様の入念な計画であつたと思います。

その頃の私は、集会で結婚し、子供も出産し、一人前になった気になっていました。集会の姉妹としても一人前になった気になっており、無意識に気負っていました。そして、子育ての勢いに乗って、苦手なはずの人付き合いも積極的になり、いわゆるママ友付き合いが意外とうまくいってしまい、いつの間にかやれできると思うようになっていきました。集会の中でも外でも、一方ではイエス様に祈りながら、一方では自分の頭をフル回転させて、良いと思うことを自分の力でこなしていました。若く体力も気力もあったので、それができてしまっていました。マ友だちや保育園、学校の先生方に集会の冊子やCDを、機会を見つけては配っていました。実を結ぶことはありませんでした。自分ではまったく気づいていなかったのですが、イエス様を紹介するのではなく、イエス様を信じている自分を紹介していたように思います。大抵の方々は、我が家を見ると、四人も育ててすごい、しかも障害のあるお子さんもいらっしやるのに、よくやつ

ている、とおっしゃってくださいました。それを聞くと、口ではそんなことないです、と謙遜しながら、心の奥のプライドが満たされていくのを感じました。イエス様がくださった結婚と子供たちのはずなのに、愚かにも、私だからできているのかもしれない、とまで思うようになっていきました。盲目の状態でした。しかしイエス様はこの期間を許され、じっと見ておられ、あわれんでくださり、そのままに捨て置くことはなさいませんでした。末っ子が三歳になり、子育てがやっと一段落ついた頃、どうやってもうまくいかない人間関係が与えられました。それまでうまくいっていたやり方が、まったく通用しませんでした。良かった人間関係もろく崩れていきました。最初は、自分の力と知恵に頼ってがんばりました。みんなはうまくできているのに、自分だけができないのはおかしい、せめて表面だけでも取り繕っておきたい、そんな思いでいっぱいでしたが、やればやるほど悪くなる一方でした。自分の居場所になつていた場所が、一番行き

たくない場所になりました。積み上がっていた、がんばればできる、という思いは一気に吹き飛び、人の顔色をびくびくと伺う弱い自分に戻りました。鬱（うつ）っぽくなり、朝目が覚めた瞬間には不安に満たされていて、心は重く、しかし、主人と子供を送り出さねばいけない義務感でやっと起き上がっていました。集会に行つて人と顔を合わせるのも嫌でしたが、主人に引きずられるように、集会には行き続けられました。なかなか交わりの中でも言い出せずにいましたが、ついに苦しくなつて、自分から話して、祈ってもらうようになりました。これは自分でどうがんばっても、どうにもならないのだ、と気づくまでにかなり時間がかかりました。そして、必死な思いの中で聞くメッセージやみことばは、今までとはまったく違った角度から、心の中に入ってくるようになり、祈つてくださる姉妹方がちゃんと話を聞いてくださり、祈つてくださる姉妹方がちゃんと与えられました。たくさんのお交わりとメッセージとみ

ことが与えられました。それまで信仰によって歩んでいるつもりでしたが、悩みの中で、それは大間違いであることに気づかされました。もがきながら交わり、祈るのですが、どこかずれていて、祈っても、祈っても、交わっても、交わっても、苦しい思いがなかなか楽になりませんでした。

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。（ピリピ 2:21）

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならぬ。それは、あなたが苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。（申命記 8:2）

数年の悩みの期間を通して、イエス様は私の心のうち

にあるものが何であるかを明らかにされました。みことばの通り、私には信仰などなく、自分のことを求めるだけの者でした。自分のことを求める祈りでしたので、聞かれるはずはありませんでした。私は祈って元氣をもらったら、また自分で歩もうとしていました。長い時間がかかって、やっとそのことに気づかせてもらいました。でも、気づいたとしても、また同じことを繰り返してやっってしまう自分がいて、落ち込むばかりで、どう日々を歩んでいったらいいのか、という疑問が残りました。どうしても、思考回路が、「こんな自分のままでいいはずがない。良くなりさえすれば、毎日喜んで歩めるのに」というところに向かつてしまいました。イエス様はたくさんメッセージを通して分かりやすくその疑問に答えてくださいました。

ある日こんなメッセージを聞きました。「この私は大丈夫、という欲望は最大の欲望である。これがないと人は不安ではない。人は、私は大丈夫と思いたい。」

自分からこの罪を離すことはできない。イエス様がこの私の罪、利益、プライドを払いのけてくださる」。自分のことをずばりと言いついて、驚きましたが、自分にはできないから、イエス様が払いのけてくださるということが嬉しくて、すーっと心に入ってきました。「イエス様は人をきれいにしたり、直したりしません。古い人は、十字架によってもう死んでいます。そしてイエス様のよみがえりの命にあって生きるものとしてくださいました」。「人はすぐに信仰が深くなったと勘違いする。毎日、十字架に死んでいる自分を見て感謝して、私の内におられるイエス様に感謝することです」。「イエス様は私たちの人生を買い取ってくださいました。もはや人生は自分のものではなく、イエス様のものです。」

悩み自体は解決していません。今でも日々、何も変わらない自分を見いだします。でも、以前よりもずっと、十字架とよみがえりの命がありがたいと思うようになりました。そして、再臨のイエス様にお会いするとき、

「すべてが最善だったよ」と声をかけていただけることがとても楽しみです。

松下たまき

一九七三年十月五日東京で生まれ、千葉市で育つ。

現在は長野県長野市に在住。

夫・明文(あきふみ)、長男・直人(なおと)、

次男・誠治(せいじ)、三男・雄基(ゆうき)、長女・ひとみ

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

(ガラテヤ 2・20)

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

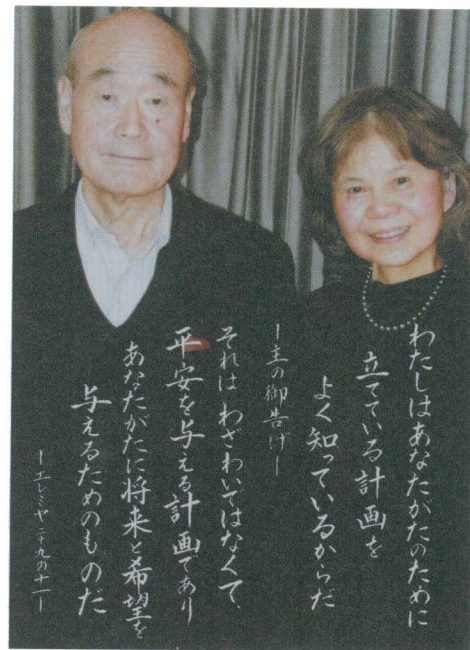
(詩篇 138・8)

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

(ローマ 7・24～25)

主の手にとらえられて

西脇 莞爾



妻の昭子さんと

私は、六十五歳のとき目の病気である黄斑変性が原因で視覚障害者となりました。日常生活に不自由を強いられるほどで、ときどき危ない場面に会うこともありましたが、イエス様に守られ支えられていることを感謝して前に進んでいます。

また四十六歳のとき一過性脳虚血発作で倒れ入院しました。十分回復しないまま退院し仕事に復帰したので、その後の生活に支障をきたしました。そのとき、今までの生き方を見つめる時期なのだとは思ったのですが、多くのエネルギーや時間を仕事に充てて自分の時間を犠牲にし、身体に不安を抱えながら前に突き進んでいきました。そして責任ある地位に就くことになったのですが、一方で大事なものを失った気がしました。一番大切なことに早く気づき、それを大切にすべきだったと、今では思っています。

会社生活は順風満帆ではなく、多くの困難や逆境の壁にぶつかりましたが、ともあれ無事定年を迎

えました。これからは自分の思い通り自由に生きていこうと決め、やりたいことなどを計画し実行していました。友人たちとこの世の楽しみを味わい、平凡だが充実した生活を送っていました。

しかし目の病気が生き方を大きく変えました。人生は計画通りいかないことは分っていましたが、人生計画が崩れ落ち、本当にくやしくてやりきれなかったのです。自分の抛り所を失ったようで、この先どうやって生きていけばいいのか悩み苦しんでいましたが、イエス様は私に新しい道を用意してくださったのです。

二〇〇五年八月御代田で洗礼を受けました。六十五歳のときです。そのとき妻の信仰歴は二十七年目に入っていました。私が東京勤務のとき、妻は同僚の奥さんに誘われて教会に行っていました。その後仙台へ転勤になり、そこでキリスト集会を知り仙台集会へ導かれました。

私は目の病気を通して救われましたが、まさかこのような方法で導かれるとは夢にも思いませんでした。イエス様は私の上に立てている計画を着々となしでくださっていたのです。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。
(エレミヤ 29・11)

私が初めて集会へ行ったのは定年を迎えてからです。それまでは運転手がわりとして集会や各地の喜びの集いへ送り迎えをしていました。初めて日曜礼拝へ導かれたときは何か違和感があり、なじめなかったことを覚えています。また信者の方から話しかけられることがありましたが、なかなか打ち解けられませんでした。その後も、ときどき行っていました。が、あまり関心がなく、またいろいろ思うこともあり、結局行かなくなりました。

しかし信者であった妻と私との間には問題がたびたびあり、そのままの状態では将来もっと大きなことが起こりかねないから、やはり同じ土台の上に立つて歩まなければならないだろうと思っていたことは事実です。ただ、いずれ信者になるとしても、七十歳ぐらいから取組めばよいと自分勝手なことを考えていました。

ところが私の思いと主のみこころは違っていたのです。イエス様は七十歳まで待つてはくれませんでした。洗礼を受ける半年前、ゴルフ場から車を運転して帰宅途中、信号機が歪（ゆが）んで見えたり、一瞬見えなくなったりと異常を感じたので、軽い気持ちで病院へ行き診察してもらったところ、先生から、これは黄斑変性という進行性の病気で現在は決定的な治療法はない、将来は失明するかもと言われました。私にとっては降って湧いたような話で、病名を聞くのも初めてで、ショックな宣告でした。そんなとき次の

みことばが心にとまりました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

誰でも試練はやってきます。私はどのような試練に会うだろうかと思っていました。主治医から説明を聞いたとき私は、この病気が人生を一変させるのはもつと先だろうと軽く考えていました。しかし、恐れていたことが現実になりました。予想外の早さで病気が進行し、視力は急激に低下していききました。眼内に注射したり、目にレーザーを照射するなどの治療に二縷（いちる）の望みをかけていただけに、望みが

断たれたことはたいへん大きなショックでした。しかしこの現実をなかなか受けとめることができず、まだこの世のいろいろな楽しみなどに未練があり、それを断ち切れずにいました。

このような状況のなか、治療や生活のことなど将来への不安がつのり、ついにうつ病になってしまいました。もうギブアップ寸前でした。そのとき集会の場にいれば何か道が開かれるのではないかと思ったのですが、まだイエス様に助けを求めようとは思いませんでした。ただ何かに頼らなければ生きていけないと思っていました。

気持ちが大きく変化したのは日曜礼拝で聖餐を受けてからです。その日、私は聖書のメッセージを語られた重田定義兄弟に初めてお会いし、礼拝の前に三十分ほど交わっていただきました。そして礼拝後に兄弟から「もう信じたでしょう」と静かに言われ、少しとまどいながらも私は思わず「ハイ」と答えてい

ました。そのときすでに私のうちにイエス様が働いていてくださったのでしょう。心に迷いはありましたが、イエス様を受け入れることで自分の人生が変わっていく、という期待があつて、これからはイエス様を信頼し委（ゆだ）ねて生きていこうと決心しました。そして洗礼を受けました。

私は、辛い状況から抜け出したい一心で必死に祈り、また聖書を読みました。しかし平安や喜びがないのです。なぜだろうかと悩みました。本当に熱心に祈りましたが平安がないのです。ましてや祈っても不都合な結果になるとなおさらです。そんなときある兄弟との交わりを通して、私がすべて委ねると言うておきながら委ね切っていないからだ。また自分のことばかり祈るのではなく、もつと神を知りたいという祈りをしたほうがよい。そうでないといくら祈っても深みにはまり、容易に抜け出せなくなると教えてくれました。本当に自己中心の信仰でした。このこと

に早く気づいたのは感謝でした。これで何か肩の力が抜けたような気がしました。

そしてみことばを信じて祈り続けていくと徐々に不安が薄らいできました。でも罪のことで悩まされることはありました。この人生、きれいごとでは済まされないことが多くあり、私は思わず知らず過ちを犯し、また危ない橋を渡り、罪を重ねてきました。これらの罪が頭をよぎると、憂鬱(ゆううつ)になります。ひよっとして病気になったのは今までの罪の報いではないかとさえ思ったりしました。しかし罪は悔い改めれば赦され、思い出されることもないと聖書に書かれてあり、そのことを実現してくださったイエス様の十字架の死に、感謝しました。

ところで私は、二十八歳のときに見合い結婚をして二人の子どもが与えられ、大きな波風もなく普通の家庭生活を送っていました。しかし妻が信仰をもつようになってから、微妙に意見のくい違いが生じ、

互いの気持ちに通じなくなっていました。

当時、責任ある仕事に就いていた私は忙しく仕事に追われる日々を送っていました。そのため妻と十分話し合う機会がありませんでした。当然、妻と意思疎通ができず、意見が合わないことが多々ありました。例えばこの世ではごく当たりまえのように行われている葬儀での焼香のことや、長男の結婚式などの問題をめぐって考え方や価値観のズレが生じ、そのズレはなかなか埋まりませんでした。

このような状況の中、私の心の支えだったのは私の兄が妻の信仰を理解してくれていたことです。それが私にはとてもうれしかったのです。兄は私より十七歳年上で、内科を開業していました。いろいろ相談に乗ってもらい頼りにしていた兄です。親がわりでもありました。三十年以上前から実家に帰るたびに、妻は兄にイエス様のことを話していました。妻は「お兄さんは真理を求めている」と言っていました。兄は

よく妻の話を聞いていました。兄は私に「昭子さんはよい信仰をもっている。死ぬとき苦しまずにすむことはいいね」と話していました。兄は四年前ベックさんと交わり、その後召されるまで家庭集會に集っていました。兄の影響があつたのだろうと思いますが、兄の

長男夫婦も交わっていただき、嫁は救われました。

これまでいろいろ話しましたように、たびたび問題が起こるのは私が無信者であつたからです。そうした問題に対する妻の取組み姿勢はいつも正しかったのだと、私は思っています。しかしその問題のさなかには、私はなかなか理解できませんでした。お互いの気持ち伝わらないチグハグな生活でした。しかし今の私があるのは妻のおかげだと思います。もし妻と一緒でなければイエス様に出会うことなく今も苦しんでいたに違いないと思うからです。

さて、目は二〇一五年八月に出血したこともあり視力は失われつつあります。私はこれまでずっとイエ

ス様にこのトゲを私から取り除いて欲しいと願い求め祈ってきました。ここにきてやつとイエス様のみこころが示されたと思っています。お前はこのままでよい、このままで十分だ、というみこころです。

今、不安は残るものの試練を乗り越えさせてくださり、また倒れては立ち上がる力を与えてくださり、倒れそうになれば支えてくださるイエス様に感謝しています。

私の残された生涯はあとなずかです。進行性の病気を抱えて、先は見えないし、つらいです。しかし私が会った試練は、人生を切り開き新しい世界を見つけ、明るい見通しのよい世界へ導いてくれました。ひとつのきっかけで人生が変わると言われます。

病気がきっかけで自分の思い描いた人生とは別のイエス様に導かれる人生へと変えてくださった事実を、私は感謝しています。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

(詩篇 119・71)

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

(エペソ 1・17)

西脇莞爾(ニシワキカンジ)

一九三九年 兵庫県出身

県立加古川東高等学校、中央大学法学部卒業

大同生命保険株式会社(定年退職)

妻・昭子(アキコ)

長男・嫁

次男・嫁・孫

わたしはあなたの名を呼んだ あなたはわたしのもの

伊藤 よう子



右がよう子さん、みなさんと

私は、かつて勤務していた法律事務所の女性事務員の三年間にわたる真心と涙の祈りを通してイエス様のもとに導かれ、一九八九年十二月二日、彼女の紹介により、カナダ人宣教師の方から洗礼を受けました。

その数年前から、私は、カール・ヒルティの本などを通してイエス様を求める思いが強まっていたので、カトリック教会、日本基督教団などの教会を覗(のぞ)き歩いていました。しかし、持ち前の疑い深さと気難しさから、どの教会にも定着できず、また聖書自体どうしても信じることができていませんでした。

一九八六年秋、冒頭の女性事務員の勤務する法律事務所に入所したとき、彼女は、私に会うや、私の救いについて主から祈りの課題を与えられたと感じたそうです。それから三年間、私のために秘かに、しかし必死で祈り続けてくれました。何の価値もない私のために、彼女がどれほどの忍耐をもって祈り続け、

また犠牲をいとわず、謙遜と愛をもって私に仕えてくれたか(文字通り「仕える」という言葉がふさわしい態度でした)を思うと、今でも涙を禁じ得ません。イエス様の周りをぐるぐる回りながらも、傲慢で頑固で疑い深く、どうしてもイエス様に最終的な「はい」を言えないでいた私がイエス様を主として受入れるまで折り通すことは、彼女でなければできなかったのではないかと思います。

主は、私の勤務先を彼女のいる事務所に変え、彼女に出会わせてくださり、ご自身のもとに引寄せてくださいました。イエス様の、その深いご愛と憐れみに、ただただ感謝します。

このようにして受洗した私でしたが、その後集うところもなく彷徨(さまよ)っていた時、高校の先輩であられた故瀬島兄と同校同期の増井錠治兄、及び吉祥寺近辺に住まわれる数名の兄妹を通して、キリスト集会に導いて頂きました。そして、私とほぼ同じころ別

の経緯で救われた神田啓子姉妹(増井兄と同じく私の高校の同期生)と共にこの集会に集わせて頂くようになりました。一九九〇年秋のことでした。

それから早や二十六年が経過しましたが、あれほどの恵みによって救われながら、信仰の歩みはお粗末そのもので、何の実も結ばないことを恥じるばかりです。同時に、そういう者をも今日まで養い育ててくださった集会とベック兄妹の深いご恩を改めて思わされていきます。以下は、そのような者を、主がどのように取り扱い、何をなしてくださったかについての拙(つたない)報告です。

だいぶ前のことになりますが、ある男性(「Aさん」)が民事事件に関して受取った内容証明を持って相談に見えました。その書面は要領を得ないものでしたので、私は相手方代理人に電話して疑問点につき説明を求めると共に、話し合いによる解決の可能性を打診しました。しかし、相手方代理人は、すでにA

さんに説明済みであるとのこと、私の疑問に正面から応答しようとせず、提訴を急ぎました。そこで、私は、「言われなく大変な要求を突き付けられて苦しむAさん側(被告)の代理人」として応訴することになりました。

訴訟開始後も、原告(相手方)の主張は要領を得ず、こちらがその矛盾点を指摘し、相手方が釈明したり主張を訂正したりする時期がかなり続きましたが、その後、裁判官がこちらの主張を正當と認めてくれた様子で、相手方に対して、その不利を前提とする和解を勧告しました。私は、内心、「だから言ったでしょう」と得意になっていました。

ところが、その後、ある重要な点についてAさんが私に話したことが事実ではなかったことを知り、打ちのめされることになります。提訴から相当期間が経過し、訴訟手続きがかなり進行した段階でした。

事案に応じた確認作業をした上で事件処理をす

ることは弁護士としての常識であり、私自身も十分わきまえ、実行しているつもりでした。Aさんの事件についても、手間と時間をかけて資料を収集し、細かく事実をチェックしました。

ところがこの事件では、具体的事実の調査に手間と時間を要したこともあって、私は先を急ぎたいという思いから、それとは別のある基本的事項の確認作業を簡略化してしまいました。その背後には、「その事項に関しては、そこまでしなくても大丈夫。私にはわかる」という驕(おご)りがありました。

それまで主張の基礎としていた事実が真実ではなかったことを知った私は、当惑し、以後の手続きに関して苦しむようになりました。詳細はお話しできませんが、私はその事件の取扱いに関して大きな困難に直面し、日増しに追い詰められて行きました。

苦しみのあまり夜明け前に起きて祈り、必死で聖書を読みました。みことばによって慰められること

はあつても、祈りを終えるや現実引戻され、その苦しみに苛(さいな)まれる状態でした。私は、この苦しみの主にある兄姉にも語らず一人で抱え込みました。その理由の一つに弁護士守秘義務があったことは事実です。しかしそれ以上に私を閉鎖的にしたのは、「この苦しみは、同業者で、同様の愚かな失敗をしたことのある人で、しかもクリスチャンでない限り、絶対にわからない」という思いでした。また、「仮に『その苦しみは、わかるよ』と言ってくださる方があったとしても、それでどうなるわけでもない。この苦しみから救われるには、イエス様に訴えるしか方法がない」と思い詰め、日が経つにつれ、この件に関する限り、固く固く自分を閉ざすようになっていきました。ベック兄については、「未信者の救いにお忙しいベック兄を、こんな個人的悩みで煩わせるべきではない」という思いが無意識に働いたのだろうと思います。このことで交わりをお願いすることはありませんでした。

しかし、「主に祈るしか方法がない」と思って祈っているのに、イエス様はあたかも完全に無視しておられるかのように感じられ、味わうのはただ主の沈黙だけでした。まだ暗いうちに起き、文字通り床にひざまずいて、「イエス様、心から、心から、心から、お願いします。私にはどうしようもありません。どうしても、私には、絶対できません。どうか私の咎を赦し、憐れんでこの苦境からお救いください」と祈り続け、遂には、オロオロ泣きながらのお祈りになりましたが、泣こうとわめこうと、お答えはありません。叩いても叩いても、鉄より頑丈で重い主の扉は微動だにせず、開かれる気配さえないように思われました。そして、当初「イエス様、私の祈りに答えてくだらないのですか？」とつぶやきつつも必死に祈っていた私は、次第に祈る気力さえ失い、聖書を読んだ後、白々と明け染めていく空をただ茫然と眺める日々となりました。

私の大きな過ちは、主に向かう姿勢・動機にあつ

たと思います。私は自分を閉ざし、ただ一人で主に祈り続けましたが、一人で祈ること自体が間違っていたとは断定できません。その時、主がそのような孤独を私に与えられたのかも知れないとも思います。しかし、外部に自分を閉ざし、ひたすら主に祈るとしても、それは主の御心を一心に尋ね求め、御心だけに従うためであるべきでした。それなのに私は、「ほかの人に言っても、だれも理解してもらえないから」と、自分を閉ざしてただ一人で祈っていたのです。私は、イエス様、イエス様と泣き叫びながらも少しもイエス様を見ず、自分の目の前の問題ばかりを見つめていました。そして、イエス様に従うことよりも、ただその苦しみから救われることを求めていたのです。しかも、無意識にはありました。自分の思いをしっかりと握りしめ、イエス様の救済は私の想定する方法でやってくるべきであるかの如く、主を制限していました。本当に罪深く、思いついた姿勢だったと思いますが、当時の混乱した

私は、それに気づきませんでした。

以上の状況がしばらく続いた後、私は体に不調を覚えはじめ、しかも段々悪化していくように思われましたので、医師であられる集会の兄弟に診て頂くことにしました。「主は、更に私の肉体までも打たれるのか」という思いになり、主を、罰することばかりを好む厳父のように感じました。しかし、この時、主にある兄弟に診て頂くことになったのは、主の憐れみだったと思います。閉ざしていた心に強制的に風穴を開け、目を自分の苦しみの外に向けさせるきっかけとなったからです。

その時の私は、内心「ボロボロ、よれよれ」状態でしたが、その体調不良を、仕事や自分の悩みと関連付けて考えてはいませんでしたので、受診の際には仕事や精神上の問題には一切触れず、ただ肉体上の不具合をお話ただけでした。しかし、静かに患者の話に耳を傾け、言葉は簡潔ながら謙虚で親切な対応を

される兄弟の態度に、私は、「静けさと謙虚さは、それ自体、(少なくとも精神の)癒しだ」と感じました。それは未信者のお医者さんからは受けたことのないものでした。私は、今でも「主がおられたに違いない」と思っています。そして、導いてくださった主と兄弟に感謝するとともに、わが身を反省させられました。きつと私は、これまで相談にみえた方々に、主にある「良き物」をお渡しするどころか、落胆だけを与えて去らせたことが稀ではなかったことでしょう。できることならお詫びしたい思います。

Aさんの件はその後もかなり長引きましたが、遂に結末を迎えました。そして、その頃、思いもかけずAさんが、「私は、今回のことでクリスチャンの先生を苦しめました。本当に悪いことをしたと思っています」と述べ、深く頭を下げられました。

私は、Aさんが故意に虚偽を告げたのか、それともそれは記憶や勘違い等の結果だったのかは、ただし

ませんでした。確かに相手方の主張が真実であり、

Aさんの言ったことは事実に戻っていました。しかし本当の意味では、相手方は加害者だったと考えられます。しかも、その加害行為は長年にわたるもので、Aさんは、自分の大切な家族が、長年馬鹿にされ、酷い目にあわされてきたことを知り、悔しさに耐えられなかったのだと思います。相手方の加害行為を取上げようにも既に時効が完成しており、証拠資料の多くも既に廃棄されていました。それでいて権利だけを主張する相手方を、Aさんは許せなかったのでしょう。もちろん、そうだからと言って虚偽は許されるはずありませんが、そういうAさんの心情を考えると、私は虚偽だったか否かを問いたです気にはなれません。まして、私の落度さえなければAさんの間違いは問題にならなかったことを考えれば、私にAさんを問いただす資格はないと思われました。そういう中で、Aさんが前述のように述べられたので

す。実はAさんはAさんで、私とは別の意味で苦しんでおられたのです……自分の苦しみばかりにとら

われていた私は、この時はじめてそれに気づきました。

このように、苦しみにあつても外的姿勢をとり続け、愚かで誤った思考に終始した私でした。しかしそれでも尚、主は、訴訟に関するすべてが終ってしばらく後、(ここに詳細を明らかにすることはできませんが)まさに驚くべき方法で、豊かな恵みと、憐れみと、慰めとをくださいました。それは同時にAさんへの大きなプレゼントでもあり、私は、こんな事があり得るのかと驚き、主にひれ伏す思いでした。

たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。(哀歌 3・32〜33)

いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深い

(ルカ 6・35〜36)

からです。あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。

あれからまた時が経ちました。最近、私は、「幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。」(詩篇 41・1)、「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。」(エペソ 5・1〜2)というみことばに特に心を留めています。しかし、いずれのみのことばも、私の実態とはおよそかけ離れたものです。

そもそも「弱っている者」とは誰でしょう。私にはそれを見抜く力さえありません。悲しむ人、それは目の前で泣いている人とは限らず、悲しみではち切れそうな思いを胸に秘めつつも満面の笑みを浮かべ、他人をも笑わせている人なのかも知れません。不愉快な言動で人を困らせる人は、もしかしたらイエス様

の愛を最も必要としている人かも知れません。けれども私は、それらを正しく見分ける力を持ちません。また、私の内には、今なお利己主義・自己中心しかなく、愛のかけらさえありません。

それでも、主は不可能を命じられることはなく、私の自我の卑劣さ、醜さ、愚かさをご存知の上で愛してください、励ましてくださっています。また、このように主に愛して頂いている私は「他の人を愛さない権利」を持たないことを、主は示してくださいました。以前は、「誰を愛し、誰を嫌おうと私の自由である」かのような思いでいたのですが、それは過ぎ去った時でもう十分であると、主は語ってくださいます。そして、それが私に希望をもたらしています。

今はただ、片時も離れず主のみもとにさせて頂きたいと願っています。愚かな羊にして、その最上の場所からさえ度々迷い出してしまうような者ですけれども、それでも私は主のものですから。

私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

(詩篇 100・3)

伊藤よう子

一九五〇年 島根県出雲市にて出生。

島根県立出雲高校、東京大学文学部、法学部卒業。

東京弁護士会所属弁護士。

85ページから93ページは本人依頼で削除しました。





キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

【電話】0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会

10:00 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:00

中高生日曜クラス 9:00



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によるこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、

主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

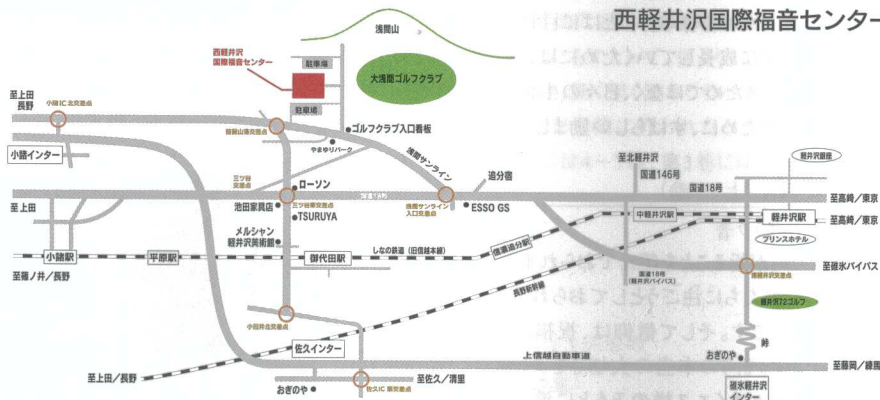
家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

【電話】0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 ☎389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

【電話】0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 ☎389-0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km

御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。

■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを感じ知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと - ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ - 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31:3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ぎうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第45号
定価100円（税込み）2017年7月15日初版

編集スタッフ	清水洋一 古田公人 田中順治 石塚稔成 石塚優子 岩本秀造 岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会